

小浜島から流出した古記録と「沖縄文化展」について

園原 謙*

Outflow of Ancient Documents from Kohamajima Island and "Exhibition about the Okinawa Culture"

Ken SONOHARA*

はじめに

1972年に上梓された『小浜島誌』は、島の歴史、民俗、文化に関して著された力作の島誌である。著者の山城浩氏は小浜島出身の元教師で、40年余り学校教育に携わった人である。同氏は、小浜島民俗芸能保存会の立ち上げに尽力し、その初代会長を務められた方でもある。

『小浜島誌』の巻末には、小浜島の古記録に関し、「夢の文献」という題で本人の心残りの筆が次のように認められている。

「小浜島、石垣安蔵氏(ちんちにや)の秘蔵に島の重要記録が現存していたようである。ところで、崎原孫基氏が借覧され、物故された後は、文(崎原氏娘)保管中、昭和27年頃、三重県立博物館主事であった古江信氏により持ち去られてしまった。その証には、金城聖吉氏へ感謝状が贈られている。その経緯を察知し、関係者の承諾を得て、古江信氏と文書を取り交わし、その現存を確認し、更には仲盛憲一氏が本土研修旅行中面談の結果近く送達する意図を伺えて、一日千秋の思いで、鶴首したが遂に空念仏に終る。同古記録は、何でも”沖縄郷土館”開設の資料に供されているとも伝え聞いている。このように、島の古記録など秘蔵されていたようだが、尊い文献として発掘されない間に散逸したり、無関心の中に思いがけないとんびにさらわれた格好になっ

ている。今にして思えば、遺憾千万遣る方無しの夢の文献となってしまっている。」(山城浩『小浜島誌』p.200)

小浜島誌の執筆にあたり、金城家から流出した古記録について、同誌の中で言及できなかった無念の言となっており、その存在に言及している。

そこで、本稿ではまず、この古記録の存在の有無を確認したいと考えた。もし可能であれば、翻刻を含め、その内容について言及することができる。それで山城氏の思いが解消されることになるからである。

古記録の行き先とされる三重県立博物館へ照会するとともに三重県へ出向き、山城氏が言及した当時の博物館員の古江信氏に面談し、同記録の流出の顛末について書き記すことにした。また、何故三重県立博物館が沖縄関係資料を蒐集したのか、その目的と意義についても合わせて考えてみたい。

三重県立博物館の沖縄文化展

三重県立博物館は、昭和28年(1953)6月に開館した総合博物館である。三重県内で採集、発掘した資料等の展示のほか、郷土の自然と文化に関する調査研究活動、自然科学、歴史の様々な教育普及活動を行っている。また、収蔵資料は考古、歴史、美術工芸、民俗関連資料や動植物、化石、鉱物資料など

※ 〒900-0029 沖縄県那覇市旭町1番地(県南部合同庁舎8階) 沖縄県教育庁文化施設建設室

* Cultural Facilities Construction Office, Education Department, Okinawa Prefectural Government, 1Asahimachi, Naha, Okinawa 900-0029, Japan

44,000点を収蔵している。特に、特別天然記念物オオサンショウウオの飼育、平成8年に鳥羽市で発見された恐竜化石に関する資料、植物や貝類コレクションは有名である。

実は、この東海地区の一地方博物館は、昭和37年(1962)に全国に先駆けて「沖縄文化展」という展示会を開催している。同展開催にあたり、沖縄展後援組織委員会が設置されており、当時沖縄出身の出世頭であった大浜信泉早稲田大学総長が名誉顧問に据えられ、三重県知事が顧問、三重県教育委員会教育長が会長に就いている。また、琉球側の参与として、琉球政府文化財保護関係者、宮古・八重山教育長など多くの沖縄関係者など、さらに日本側の参与として鎌倉芳太郎や東恩納寛博など本土在住の沖縄研究者などが関わり大規模な後援組織のもとで、開催されたことがわかる(表1 三重県立博物館主催「沖縄文化展」後援組織委員会一覧を参照)。

沖縄文化展の開催形態をみると、主催は三重県立博物館・三重県教育委員会、後援に文部省、文化財保護委員会、東京大学人類学教室、日本民族学博物館、早稲田大学、立教大学、女子美術大学、NHK、中部日本新聞社、川崎市教育委員会と名を連ねている。さらに、協賛団体には近畿日本鉄道、三重交通、大阪琉球物産幹旋所、三重県婦人会、三重県遺族会となっている。

同展図録に「沖縄展開催に当って」の開催趣旨文が記されているので紹介しよう。

「沖縄は古くから日本と支那との文化を吸収し、独特の文化を生み出した。誠に些々たる孤島にもかかわらず、文学をもち、音楽と舞踊をもち、工芸をもち、さらに特殊な言語と民俗をもち、そのなかには、三重県の古銭(伊勢の鳩目銭)が海を渡って、琉球の鳩目銭を生み、また三重県重要文化財の白子の型紙の源流を思わせる紅型など、まことに興味深き問題が多々包含されています。

この幾多の文化の跡をたずね、同時に沖縄問題がクローズアップされている今日、第二次世界大戦中2,387柱の肉親や友が悲しくも散って行った沖縄に思いをはせ、哀悼の念を新たにするとともに、われわれの同胞沖縄を深く深く理解すべき時がきたのではないのでしょうか。公平な視野に立脚して、その全貌を展覧し、一般の人々に沖縄に対する正しい認識

を与えることといたしました。

本展示会によって、東洋のハワイと呼ばれる果てしない沖縄の文化の情緒に直面せる時代の脈博を感じることができれば幸いです。

今回諸先生方の特別のご好意により、全国にさきがけて、貴重な資料が県下に初公開されるようになりましたことは深く感謝致します」(三重県立博物館『沖縄文化展』(図録) p.2)。

この序文から展示会開催の趣旨が理解される。そのひとつは、三重県人の沖縄戦戦没者が2,387人に上ったことである。三重の人々に沖縄の地で亡くなったことに対する哀悼の念を想起させ、日本から隔絶された沖縄を理解し、沖縄に対する正しい認識を与えることが、この展示会開催の一義的な目的であったのだ。

戦後10数年を経た日本本土における、それも一地方人の対沖縄観、すなわち沖縄に対する理解はどの程度のものであったらうか。

同展開催期間中の昭和37年4月から6月の3ヶ月間の地元新聞の中部日本新聞社(昭和39年12月31日から中日新聞に社名変更)の紙面をみると、沖縄問題についての記事は3本ほど確認できた。その記事の内容は、日米両政府の沖縄に対する施政権の対応等についてのものである。これだけの頻度でもって、情報が多いいとはいえないが、一般的本土人にとって、沖縄に関する情報が全く入手できなかったわけではなかった。しかしながら、少なからず、米国施政権下における沖縄の人々の生活実態に関する情報は、三重県人に限らず、多くの一般的日本人には知る由もなかった。

戦後間もなく刊行された石野径一郎の小説『ひめゆりの塔』を原作にした今井正監督の同名映画「ひめゆりの塔」(1953年1月封切)で知られる悲劇の南島・沖縄が、本土人の一般的な沖縄観として支配的であったのではなかろうか。

沖縄戦に動員された県立師範学校女子部と県立女子一高女の女子学徒の最後を描いたこの映画は、沖縄はもとより、全国で大ヒットした。三重県人にとっても、他県人同様沖縄の地は、ひめゆりの学徒と同じ末路をたどった親、兄弟など肉親の生命を散らせた忌まわしい悲劇の南島であったにちがいない。

この展示会の協賛団体に、三重県遺族会が名前を

連ねていることは興味深いし、また大浜早大学長が名誉顧問に就任したことについても、氏の沖縄問題との関わりをみる上で興味を引く。

大浜氏は外国法律の専門家であり、弁護士事務所も開業した実業家タイプであった。学校行政にその敏腕をふるい、54年から66年まで三選12年の長期にわたって早大総長を務めている。また、郷里沖縄についての思いは深く、戦前は東京八重山郷友会会長（1925）、在京沖縄県人会副会長（1936）に就任、戦後は沖縄諸島日本復帰期成会の陳情活動に関わっている。53年には沖縄戦災校舎復興期成会の寄付募集に協力する一方で、61年9月には南方同胞援護会会長（57年から理事）に就任し、沖縄復帰の推進に努めた。また、62年には、茅誠司や大河内一男ら有志で「沖縄問題を話し合う会」をつくり、その後の佐藤首相のブレインとして、「核ぬき本土なみ基地での返還」政策を試みようとして活躍したことは周知のことである。

沖縄の日本復帰などいわゆる「沖縄問題」について国民の共通理解と世論形成は、日米両政府に対する沖縄の返還の働きの上で大きな原動力になることを理解していた大浜にとって、三重県立博物館の沖縄文化展の企画は、たとえ東海地区の一地方の三重であっても、本土人に沖縄に関する情報発信の契機をつくる上でタイムリーであり、かつ有益であったと思われる。また、61年に就任した南方同胞援護会長として援護業務に関わる立場から、その申し出を断る理由など見当たらない。

大浜にとって、三重県立博物館の沖縄文化展開催及び同展後援組織委員会名誉顧問への就任依頼は、まさに時宜を得たものであった。同展の関連催事として、沖縄民謡鑑賞会と大浜信泉の文化講演会、三重県立大学空手部による空手演武が、5月3日～6日まで、伊勢市、松坂市、四日市市、津市の4会場で開催されている。この4日間の講演活動そのものにも、大浜早大学長の熱の入れようを伺い知ることができる。

実際にこの展示会を契機に、遺族連合会が関わった意味については後で言及したいと思う。

では、多忙な大浜をそこまでその気にさせた展示会とはどんなものであったのか。具体的にどのような資料構成で、沖縄を理解させようと考えて、沖縄

文化展は開催されたのであろうか。当時の図録から出品一覧を抜き出したのが表2である。

出品資料の総数は、考古資料、歴史資料、民俗資料、美術工芸資料合わせて237件524点に上る。うち、借用資料先は2博物館、3大学、1教育委員会、7個人の13ヶ所であった。件数の多い順に列記すると、東京国立博物館（52件74点）、民族学博物館（28件33点）、東恩納家（16件115点）、井伊家（8件10点）、石川家（7件7点）、早稲田大学（6件108点）、鎌倉家（5件52点）、古江家（5件7点）、東京大学（4件4点）、沢田家（3件7点）、川崎市教育委員会（2件2点）、山辺家（1件4点）、女子美術大学（1件1点）という内訳になる。また、これら借用資料に加え、同展示会のため三重県立博物館が独自に蒐集した資料が99件99点^(註1)ある。資料の蒐集先は、宮古・八重山地域が主であり、展示会開催前年の1961年12月に蒐集されたものである。

展示会図録に掲載された古江信氏の調査日記^(註2)によると、沖縄調査旅行は、1961年の11月28日～12月30日頃までの約1ヶ月間であったことがわかる。日程を拾って列記してみる。

- 11月28日 三重出発。鹿児島へ向かう。
- 11月29日 線路鹿児島入り、沖縄人の経営する松本荘で宿泊。全国公民館大会出席、帰国途中の小浜島公民館長の金城氏（聖吉）と懇親。
- 11月30日 鹿児島港にて出国手続き、通関を経て、沖縄丸にて沖縄へ
- 12月1日 海路沖縄丸で沖縄入り。
- 12月2日～4日 本島南部・中北部を視察。
- 12月5日 宮古入り。
- 12月6日 新里で12,3点、下地で10数点の資料蒐集。
- 12月7日 久松で20数点蒐集。
- 12月8日 狩俣で地機を入手。
- 12月9日 保良で貝の湯わかし蒐集。
- 12月10日 池間でこれら蒐集品の中で最大の資料サバニを購入。
- 12月11日～12日 宮古での蒐集資料の整理、同資料の那覇向け発送。
- 12月12日 空路宮古から八重山入り。
- 12月13日 石垣島内視察（教育長が案内）
- 12月14日～15日 石垣市の喜舎場先生訪問、民俗

の調査について学習を行う。

12月16日 石垣で10数点入手。

12月17日～20日 石垣から竹富島へ。資料館を営む上勢頭家で懇親、帰島時に資料もらう。

12月20日 石垣島から小浜島へ、金城氏の努力で20数点を蒐集。

12月21日 小浜島から石垣島へもどり、八重山での蒐集資料の整理と同資料の那覇向け発送。

12月22日 空路石垣から那覇入り。

12月23日 大浜早大学長と那覇で面談し、調査の経過報告。

12月24日 那覇から久米島へわたる。

12月25日 上江洲家を見て、那覇へもどる。

12月26日 本島最北端辺戸岬へ。

12月27日 先島の荷物をまとめて税関手続きを経て発送。琉球石油の稲嶺氏から陶器もらう。

12月28日 蒐集資料の再検討、補足資料を那覇で購入。

12月29日 海路帰国

約1ヶ月のハードな調査旅行であったことが伺える。ここで、本稿の目的のひとつである小浜島から流出した古記録の所在について確認しておきたい。まず、表2の出品リストを見る限り、小浜島で蒐集された資料は4点しか展示会には出品されていない。表2資料リスト番号を参照すると、No111きり、No186引臼、No194の書類入、No198漁業用（道具入れ）の4点のみである。実際の資料蒐集においてはどうか。小浜島での資料蒐集に関しては、調査日誌の12月17日の欄には次のように記される。

「・・・その日のうちに小浜へ渡った。小浜島は、果報の島と歌われる程非常に豊かな島であり、アカマタ、クロマタの古い年中行事も伝えられる民族学の宝庫である。鹿児島島の宿で親しくお世話下さった金城民（「氏」の誤植）の船で島を案内され、彼の努力でえがたき資料を20数点蒐集することができた。」とされる（括弧内は筆者による）。

竹富島で資料館を営む上勢頭亨氏との話が弾み、宿営が長引き、当初の小浜島訪問が予定より2日ほど遅れたようであるが、小浜島では鹿児島島の松本荘で親しくなった公民館主事の金城聖吉氏にお世話になった。金城氏は小浜公民館主事として沖縄文化展後援組織委員会にも琉球側委員として名を連ねてい

る。小浜島で蒐集した資料は「20数点」と記される。問題は、その20数点のうちに、古記録なる資料が含まれたかどうかという点にある。この部分については、実際のところ当事者にしか分からないことである。20数点の内訳については不明である。展示に供されたのは、これらのうち4点のみである。

三重県立博物館の民俗に関する資料目録^(註3)は、昭和62年3月末までに同館が所蔵している民俗資料を総覧としてまとめたものであるが、資料の種類が10種に分類されている。すなわち「伊勢型紙、沖縄関係資料、海事資料、海女関係資料、松阪木綿、軽粉資料、郷土玩具、しめ縄、農具、その他」で、その地域の資料構成を反映していて大変興味深い。しかし、その中の「沖縄関係資料」だけは異色である。これは、当時開館来て最も大規模な展示会であった沖縄文化展の開催に伴って蒐集された資料によるものである。実際の蒐集資料の総数は不明だが、少なくとも展示に供された99点の資料があった。そして、展示会開催から42年を経た今日、前掲の資料目録の上で確認できる沖縄関係資料は、29点のみである。残念ながら、その中には、小浜島の古記録に関する資料の所在は確認できない。仮に文書記録であれば、分類上、民俗資料の中の「沖縄関係資料」に含めるか、あるいは、文書や古文書資料の中に含めるかは、各博物館の資料分類方針や担当学芸員の裁量によることになる。

今から42年前の記憶を遡り、その真偽を検証することは不可能に近い。しかしながら、資料収集や受領の状況を把握することは決して無駄ではないと思われる。そこで、当時の三重県立博物館学芸員の古江信氏（73歳）と金城聖吉氏（79歳）とその夫人の文さん（79歳）から聞き取り調査を行い、その状況を確認することにした。

金城ご夫妻からは、平成14年2月14日に小浜島を尋ねて話を伺った。また、古江氏からは、平成15年9月18日に三重県立博物館で聞き取り調査を行った。

当事者の証言による古記録の行方の可能性

山城浩氏によると、古記録のもともとの所有者は、「石垣安蔵氏（ちんちにや）の秘蔵」とされていることから石垣家のものと思われる。それを崎原孫基

氏が借覧し、崎原氏が亡くなった後は、「娘の文（崎原氏娘）が保管」とある。文とは、金城聖吉氏夫人の金城文さんのことである。

まず、文さんからの聞き取りで分かったことは、古記録は、手文庫のような蓋付きの塗物（はげ落ちた朱色）に保管されていたようで、その中味は系図や人頭税関係など封筒類がたくさん入っていたように記憶している、ということであった。「夫は、（古江さんを）『喜ばそうとして、何でもかんでもあげた』」と証言した。

当時金城聖吉さんは、小浜公民館主事で全国公民館大会から帰路、鹿児島の旅館で古江氏と出会った。沖縄文化展を開催するため、教育長から特命を受け、知事から激励を受けて資料収集調査のために初めて沖縄を訪問する古江氏との遭遇がそこにあった。先島を調査対象とする古江氏にとっては小浜島公民館主事との出会いは、思いがけないすばらしい出会いであった。早速、懇親を深めることになり、小浜島での再開の約束になったにちがいない。

金城さんは、旅館業を営み、船を持っていたので、船で島を案内するとともに自身の旅館に古江氏を泊め、親好を暖めることになった。金城氏の聞き取り調査では、経年のせい、その頃の記憶はあまり鮮明でない。旅館に泊め、島を自船で案内したということは確認できたが、古記録が収納されていたと思われる、手文庫のような箱を古江氏に提供したことについての記憶は不明である。金城氏のところで唯一の確かな物証は、三重県立博物館長から金城氏へ贈られた感謝状のみである。文面にはこうある。

感謝状

金城聖吉殿

貴下は当館沖縄文化展の開催にあたり沖縄民族考古資料の調査と収集に格別の御協力をいただきましたことはまことに感謝に堪えないところでありますここに深甚なる感謝の意を表します

昭和三十七年五月十日

三重県立博物館長 松島博

古江氏の調査日記によると、20数点の資料が金城

氏の尽力によって小浜島で収集された。その協力に対する感謝のしるしがこの感謝状である。この感謝状は現在でも金城家の応接室に飾られている。

さて、資料を受領した古江氏の記憶は、資料の直接収集者であることから、一番鮮明であった。

古江氏の記憶によると、12月21日朝に小浜島で収集された資料20数点は、サバニによって石垣島に運搬された。その時に、紅型の風呂敷に包まれた物が金城さんからサバニに乗っている古江氏に投げこまれたという。古江氏の資料収集の対象は民俗資料であった。古文書等の文書資料は対象にならなかったというが、風呂敷ものについては、そのままいただくことになったようである。

資料目録に収録されている中で、文書資料が入りそうな資料をさがすとすると、No194の書類入、No198漁業用（道具入）の2点の可能性が浮かぶ。

そのことについて確認すると、一点目の漁業用の道具入れとは、本土でいう「船ダンス」のようなものであった。それには、折りたたみ用の木製枕、釣り針などの釣りに関わる資料が入っていたという。2点目の書類入とは、黒塗の蓋付きの長箱（約25cm×5.6cm×2cm）のことで、中には何も入ってなかったという。また、資料目録には含まれない風呂敷に包まれたものの中味とは、織物の裂地や杼、糸などが入っていたという。

ここで蒐集品リストの中味と証言を整理してみると、文さんの言及した「（古江さんを）喜ばそうとして、何でもかんでもあげた」ものの中に、朱塗りの手文庫があった。古記録などの文書が収納できるものとして、「手文庫のような蓋付きの塗物（はげ落ちた朱色）」は適当なものと思われる。それと、資料目録に掲載される「書類入」とは近似する。ただし、古江氏は朱塗りの箱ではなく、黒塗りの蓋付き箱と認識しており、塗りの色の食い違いが生じている。問題は、その中に書類が入っていたかどうかである。この点については、寄贈側の金城氏と受領した方の古江氏の両者の記憶は曖昧である。

これら証言を基に、現段階で流出したと思われる古記録についていえることは、仮に三重県博に持参されたのであれば、登録資料としては確認できないことから、いわゆる、登録されない「学芸資料」として収蔵されているか、あるいは消失したかとい

う二つの可能性が生じることになる。また、今ひとつは文さんの記憶違いで、古江氏に差し上げる時点で、その書類入に系図や人頭税関係の書類が入っていない可能性も浮かぶ。古江氏の証言では、書類入には、文書資料は入っていなかったことになっている。そのとおりであれば、これら資料は依然として小浜島にあることになる。

ここで、本稿を書く動機を与えた山城氏の記した冒頭の言葉を再確認してみる。まず、古記録が流出した年についての記述であるが、「昭和27年頃」と記されているが、それは「昭和37年頃」の意味で、「27年」と記されたのは、単純な誤記であろう。それは、感謝状の日付（昭和37年5月10日）を根拠にしていることから理解される。また、「古江氏により持ち去られてしまった」という記述については、資料受領の状況を反映した適切な表現ではないように思える。島の郷土史家の言い分として、実態としては、「持ち去られ」、資料が無くなったことを強調したいという心情は十分理解できる。しかしながら、資料受領に際しては、両者の了解もとの合理性があり、「持ち去る」という表現は誤解を与える懸念がある。

沖縄文化展と慰霊塔建立

三重県立博物館の沖縄文化展は、開館9年来の大きかりな展示会であった。大規模な後援組織委員会が設置され、その協賛団体には三重県遺族会が含まれる。展示会の趣旨に記されるように、三重県人の沖縄戦における戦没者の霊を弔う慰霊の意味もこめられた展示会でもあった。施政権が米軍に委ねられ、日本から隔絶され南海の孤島化しつつある沖縄に対する正しい理解を行うことが、肉親が亡くなった地への手向けにつながるという認識が、担当者にはあったのであろう。

戦後、本土一般人の対沖縄観や理解については、映画「ひめゆりの塔」の印象が強い。ひめゆりの塔は、沖縄戦に限らず、戦後沖縄や沖縄人に関する広報宣伝、情報発信の先駆的なものであったと思われる。

今でこそ、沖縄への観光入域者数は、年間500万人を越えているが、復帰以前の観光客数は統計資料

のある昭和38年が47,239人、10万人を越えた年が昭和42年で、112,117人。昭和45年が172,349人、46年203,768人、復帰の年の47年が443,692人となっている^(註4)。そして、復帰以前の沖縄観光の目玉は、何と言っても慰霊巡礼の旅であった。

沖縄県が刊行した『昭和47年度版観光要覧』によると、入域観光客の地域別施設利用状況では、本島南部地区が50.8%、中部14.7%、北部31.2%、先島3.3%となっている。また、施設別利用状況は、ビーチ、公園、史跡その他に3つに分類されており、公園45.5%、ビーチ29.5%、史跡その他25%の比率になっている。分類中の「公園」には、戦跡国定公園である沖縄戦における最後の激戦地となった沖縄本島南部の糸満市摩文仁を中心とした「南部戦跡」が含まれる。県内には沖縄戦等における慰霊塔・碑が330塔碑ある^(註5)。この数字の中には、沖縄県を除く46都道府県の慰霊塔が含まれている。

表3は、各都道府県別慰霊塔建立の概要をまとめてみたもので、建立年月日順に並べてみた^(註5)。それをみると、各県の慰霊塔建立年の傾向がみてとれる。昭和40年以前の建立は14道県（29年1道、36年1県、37年3県、38年2県、39年7府県）、40年11府県、41年13県、42年以降は8都県（42年1県、43年3県、44年1県、46年2都県、51年1県）になる。

戦後20年目までに過半数の都道府県が慰霊塔を建立している。特に昭和39年から41年の3カ年にかけては、31府県による建立ラッシュ現象が起きている。戦没者数の多寡と慰霊塔建立の遅速に何らかの相関関係があるのか。沖縄戦戦没者のみに限れば、東京都の6,500人、福岡県4,055人、兵庫県3,073人、愛知県の2,953人、三重県2,600人、鹿児島県2,582人、京都府2,536人、大阪府2,400余、愛媛県2,077人の順になる。

各都道府県にとって、慰霊塔建立事業は、遺族会の陳情要請や世論などの様々な事情があったにちがいない。復帰以前の沖縄は、各県にとって、国内ではなく、国外であった。国外に慰霊塔を建立するためには建設調整に時間がかかることになる。建立の遅速にどのような意味を持たせるかについては議論が分かれるが、戦没者の霊を早い時期に弔うことが意欲の多少に関係があるとすれば、沖縄戦戦没者数が多い府県ほど、比較的早い時期（昭和40年まで）

に慰霊塔の建立がなされている。ただし、沖縄における各県の慰霊塔に合祀された戦没者は、沖縄に限らず、ダバオ、サイパンなど南方諸地域における戦没者も含まれている。

昭和37年に開催された沖縄文化展における展覧会は、三重県立博物館での本展に加え、四日市市などでの巡回展も行われ、延べ入館者数20万人を数えたという。この展覧会を契機に沖縄理解が深まり、慰霊塔建立の世論が形成されることになったと古江氏は指摘する。

慰霊塔建立のきっかけが、沖縄の歴史・文化の理解から行われたことは注目される。三重県の沖縄等南方諸地域を含めた戦没者慰霊塔「三重の塔」は昭和40年6月26日に建立されている。比較的早い時期の慰霊塔建立である。沖縄文化展から3年を経て三重の塔は竣工を見ることとなった。表4は他県で開催された主だった沖縄（人文系）に関する展示会をまとめてみたものである^(注6)。

沖縄の歴史・文化に関する展示会が主で、その中に沖縄戦に関する資料展が含まれる。また、開催の時期については、沖縄の復帰10周年、20周年、30周年の節目に行われる傾向がある。この表で拾い上げた24件の展覧会のうち、殆どは焼物、染織品、漆工品を中心とした美術工芸資料が中心となっている。

ここで重要なことは、復帰前に行われた三重県立博物館の沖縄文化展は、戦後日本において沖縄の歴史・文化を紹介した先駆的な展示会であったのではないかということである。それは当時の世相を反映し、沖縄をはじめ南方諸地域で戦没した三重県人の霊を弔う慰霊塔を沖縄に建立する契機、運動のきっかけをつくることになった。別の言い方をすれば、慰霊塔建立計画の流れの起点に、展示会があったといえるかもしれない。そのために知事を会長に置いた後援組織委員会まで組織されたと理解した方がいかもしれない。

小浜島から流出したと思われる古記録の所在は現段階では所在がつかめない。この展示会の資料収集事業がきっかけで、その所在が不明になったとされているが、これも実のところ不明である。いずれにしても、それら資料収集を通して開催された沖縄文化展によって、慰霊塔建立という社会運動の契機を与えたことは、興味深く、注目される。

謝 辞

巻末ではありますが、聞き取り調査に御協力いただいた古江信氏、三重県立博物館、金城聖吉氏、金城文さんに感謝いたします。

脚注

- 注1：三重県立博物館収蔵品は、『沖縄文化展』（図録）（32pp. 三重県立博物館1962）の図録に掲載されているが、資料点数については記載がない。資料点数について各1点としたのは、同掲書の「沖縄調査日記より」に各集落での資料収集状況が記されていることから、各資料点数を1点とした。
- 注2：「沖縄調査日記より」『沖縄文化展』（図録）pp.23-26 三重県立博物館1962)
- 注3：『三重県立博物館資料目録Ⅲ 民俗』（昭和62年3月三重県立博物館）の凡例では、「昭和62年3月末現在収蔵している民俗資料について収録したものである」と記されており、また、「収蔵番号は今回の整備で新しく付けたものである」と、収集資料の資料の整備事業を経たものと記される。
- 注4：『昭和47年度版観光要覧』によると、「年次別空海別入域観光客数」として昭和38年からの暦年の統計資料がある（p.15）。
- 注5：『沖縄の慰霊塔・碑』（pp.163-164）の沖縄県下の「市町村・慰霊塔建立関係者別集計表」による。
- 注6：この一覧は沖縄県立博物館から資料貸出をしたものや、同館へ送付された展示会図録などを中心にまとめたもので漸定的なものである。改めて全国の博物館・美術館に対して沖縄に関する展示会の開催等について調査する必要がある。

参考文献

- 『小浜島誌』 山城 浩 1972年
『沖縄文化展』（図録） 三重県立博物館1962年
『沖縄タイムス大百科事典』 沖縄タイムス社1983年
『沖縄県立博物館50年史』 沖縄県立博物館1996年
『三重県立博物館資料目録Ⅲ 民俗』 三重県立博物館1987年
『沖縄の慰霊塔・碑』 沖縄県1998年
『昭和47年度版観光要覧』 沖縄県1973年

表1 三重県立博物館主催 「沖縄文化展」後援組織委員会一覧

役 職	氏 名	所 属
名誉顧問	大 浜 伸 泉	早稲田大学総長
顧問	田 中 覚 小 原 茂	三重県知事 三重県教育委員会委員長
会長	神 谷 四 郎	三重県教育委員会教育長
参与 琉球側	真栄田 義 見 山 城 善 三 金 城 増太郎 喜舎場 永 洵 与那覇 春 吉 糸 数 用 著 稲 嶺 一 郎 豊 平 良 顕 井 伊 文 子	沖縄大学学長 琉球政府文化財保護委員会委員長 琉球政府博物館長 琉球政府文化財審議会委員 宮古教育長 八重山教育長 琉球政府KK社長 沖縄タイムス取締役 琉球王女
日本側	鎌 倉 芳太郎 東恩納 寛 惇 宮 良 当 壮 石 川 保 宮 本 馨太郎 酒 井 万 馬 山 本 栄 一 佐々木 仁三郎 川 田 準 造 竹 田 定 英 阪 本 薫 夫 中 村 稔 松 村 一 郎 田 中 作太郎 岡 田 青 慶	芸術大学教授 拓殖大学名誉教授 武蔵野女子大学教授 日本民芸協会 立教大学教授民族学博物館 三重県立博物館協議会長 四日市教育長 津市教育長 伊勢市教育長 神奈川県文化財保護審議会委員 三重県教育委員会社会教育課長 中部日本新聞社津支局長 滋賀県立短期大学教授 考古課長 日展画家
指導委員	滝 口 宏 中 川 成 夫 奥 平 英 雄 木 内 安 夫 古 江 静 江 古 江 亮 仁	早稲田大学教授 立教大学助教授 東京国立博物館 民族学博物館 川崎市教育委員会教育主事
委員 琉球側	荻 堂 盛 進 外 間 正 幸 池 村 一 男 松 村 清 吉 池 村 正 義 下 地 恵 義 上勢頭 亨 仲 盛 毅 長 嶺 正 勝 金 城 聖 吉	琉球政府文化財保護委員会事務局長 琉球政府立博物館 宮古教育委員会次長 宮古教育委員会教育主事 〃 池間島小中学校長 竹富島民芸家 八重山教育委員会教育主事 琉球石油KK調査部 小浜公民館主事
展覧会事務局	松 島 博 西 浦 樹 一 孫 福 弘 青 木 信 生 角 田 保 考 内 田 英 二 中 林 幸 子 谷 本 幸 子 貝 発 玲 子 田 中 郁 子 古 江 信	三重県立博物館長 〃 事務長 〃 庶務係長 〃 職員 〃 〃 〃
展示会担当学芸員	古 江 信	〃

表2 沖縄文化展の資料出品目録

No	資料名	数量	小計	所蔵先	備考	No	資料名	数量	小計	所蔵先	備考
1	頭巾	1		東京国立博物館		61	供台	1		民族学博物館	
2	すでな	1		東京国立博物館		62	柄杓	1		民族学博物館	
3	花中着	1		東京国立博物館		63	えびかけ	3		民族学博物館	
4	団扇	1		東京国立博物館		64	紅型染衣裳	1		民族学博物館	
5	頸飾	1		東京国立博物館		65	わらじ	1		民族学博物館	
6	玉ほべる	1		東京国立博物館		66	印籠	1		民族学博物館	
7	勾玉	3		東京国立博物館		67	播かご	1		民族学博物館	
8	簪	1		東京国立博物館		68	バナリ焼	1		民族学博物館	
9	すじ立て	1		東京国立博物館		69	石敢当	1		民族学博物館	
10	算盤	1		東京国立博物館		70	帆	1		民族学博物館	
11	剃刀	1		東京国立博物館		71	火縄	1		民族学博物館	
12	刃物	3		東京国立博物館		72	冠り物	1		民族学博物館	
13	角宝蔵	1		東京国立博物館		73	飯汁椀	2		民族学博物館	
14	膚笥器	1		東京国立博物館		74	平椀	1		民族学博物館	
15	杓子	3		東京国立博物館		75	掛物	1		民族学博物館	
16	大平	1		東京国立博物館		76	小膳	1		民族学博物館	
17	茶碗	5		東京国立博物館		77	位牌	1		民族学博物館	
18	猪口	1		東京国立博物館		78	獅子	2		民族学博物館	
19	酎家	2		東京国立博物館		79	壺	1		民族学博物館	
20	鉢	1		東京国立博物館		80	糸車	2	33	民族学博物館	
21	茶入	2		東京国立博物館		81	琉球通宝	2		東恩納家	
22	密酥壺	1		東京国立博物館		82	鳩目銭連束	1		東恩納家	
23	水瓢	1		東京国立博物館		83	鳩目銭(琉球)	83		東恩納家	
24	水筒	2		東京国立博物館		84	鳩目銭(伊勢)	5		東恩納家	
25	油注	1		東京国立博物館		85	寛永通宝	1		東恩納家	
26	酒瓶	1		東京国立博物館		86	簪金	4		東恩納家	
27	摺鉢	1		東京国立博物館		87	簪銀	5		東恩納家	
28	俎板	1		東京国立博物館		88	簪アルミ	2		東恩納家	
29	マガイ	2		東京国立博物館		89	簪銅	1		東恩納家	
30	鍋	1		東京国立博物館		90	簪木	2		東恩納家	
31	七輪	1		東京国立博物館		91	簪鼈甲	2		東恩納家	
32	釜	1		東京国立博物館		92	朱塗鉢	1		東恩納家	
33	置台	1		東京国立博物館		93	朱漆文庫	1		東恩納家	
34	釣人形	2		東京国立博物館		94	朱塗菓子器	1		東恩納家	
35	将棋盤	1		東京国立博物館		95	首里市街図	1		東恩納家	
36	厨子甕	1		東京国立博物館		96	冠り物	3	115	東恩納家	
37	首里城花文鏡瓦	1		東京国立博物館		97	八重山風俗図	14		鎌倉家	
38	首里城花文平瓦	1		東京国立博物館		98	沖縄風景	2		鎌倉家	
39	殷元良筆 山水図	1		東京国立博物館		99	紅型(型紙)	15		鎌倉家	
40	王子按司大礼服並通常服装図	1		東京国立博物館		100	紅型染布	20		鎌倉家	
41	王女婦人大礼服並通常服装図	1		東京国立博物館		101	流水菖蒲文衣	1	52	鎌倉家	
42	大夫法服用図、内侍法服用図	1		東京国立博物館		102	琉球王龍紋唐織衣	1		井伊家	
43	一般平民礼服用図	1		東京国立博物館		103	朱漆文庫	1		井伊家	
44	山水堆錦硯箱	1		東京国立博物館		104	朱漆尚家紋文庫	1		井伊家	
45	描金東海盆	1		東京国立博物館		105	黒漆尚家紋並王女紋螺鈿繪文庫	1		井伊家	
46	朱漆茶誦盆	1		東京国立博物館		106	朱漆茶盆	1		井伊家	
47	菊堆錦食籠	1		東京国立博物館		107	朱漆王女紋三重盆	3		井伊家	
48	陶製組杯	5		東京国立博物館		108	黒漆螺鈿蒔絵机	1		井伊家	
49	三人弁当箱	1		東京国立博物館		109	朱漆鳳凰紋箱	1	10	井伊家	
50	金泥絵茶庫	1		東京国立博物館		110	貝の湯沸かし	1		三重県立博物館収蒐出品(注1)	保良
51	江(藍)型衣裳	4		東京国立博物館		111	きり	1		三重県立博物館収蒐出品	小浜
52	琉球上衣	1	74	東京国立博物館		112	自在鉤	1		三重県立博物館収蒐出品	久松
53	山原船	1		民族学博物館		113	粟刈具	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富
54	爬龍船	1		民族学博物館		114	カラカサ	1		三重県立博物館収蒐出品	那覇
55	帆型風	1		民族学博物館		115	煙草入	1		三重県立博物館収蒐出品	池間
56	星形風	1		民族学博物館		116	ブジョー	1		三重県立博物館収蒐出品	〃
57	とんぼ風	1		民族学博物館		117	鞍	1		三重県立博物館収蒐出品	〃
58	人形風	1		民族学博物館		118	麩除	1		三重県立博物館収蒐出品	〃
59	琴	1		民族学博物館		119	網袋	1		三重県立博物館収蒐出品	〃
60	太鼓	1		民族学博物館		120	きね	1		三重県立博物館収蒐出品	〃

No	資料名	数量	小計	所蔵先	備考	No	資料名	数量	小計	所蔵先	備考
121	鍋蓋	1		三重県立博物館収蒐出品	平良	181	クバ笠	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
122	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	石垣	182	刳舟	1		三重県立博物館収蒐出品	池間
123	穀物入れ	1		三重県立博物館収蒐出品	新里	183	帆	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
124	荷網	1		三重県立博物館収蒐出品	平良	184	カイ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
125	笠	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	185	ひっかけ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
126	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	186	引白	1		三重県立博物館収蒐出品	小浜
127	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	187	つき白	1		三重県立博物館収蒐出品	石垣
128	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	188	引白	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富
129	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	石垣	189	きね	1		三重県立博物館収蒐出品	石垣
130	籠	1		三重県立博物館収蒐出品	新里	190	みの	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
131	麦打具	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	191	うちわ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
132	芋摩具	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	192	帯	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富
133	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富	193	いも入れ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
134	荷馬車鞍	1		三重県立博物館収蒐出品	平良	194	書類入	1		三重県立博物館収蒐出品	小浜
135	除草具	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	195	船旅行用箱	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富
136	鋏	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	196	除草用ヘラ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
137	豆腐箱	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富	197	畑用ひっかけ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
138	篋	1		三重県立博物館収蒐出品	久松	198	漁業用	1		三重県立博物館収蒐出品	小浜
139	篋杓	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	199	雑穀入れ	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富
140	あわび粟刈具	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富	200	ひょうたん杓子	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
141	芋掘具	1		三重県立博物館収蒐出品	平良	201	水汲み	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
142	水中眼鏡	1		三重県立博物館収蒐出品	久松	202	穀物入れ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
143	糸くり具	1		三重県立博物館収蒐出品	新里	203	芋掘り具	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
144	糸まき	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	204	蓋物	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
145	糸まきと具	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	205	具頑具	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
146	地織おさ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	206	花笠	1		三重県立博物館収蒐出品	那覇
147	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	狩俣	207	ジーファー	1		三重県立博物館収蒐出品	ク
148	アダン葉物入れ	1		三重県立博物館収蒐出品	新里	208	チンチン馬	1	99	三重県立博物館収蒐出品	
149	箕	1		三重県立博物館収蒐出品	下地	209	龍樋(石膏模型)	1		川崎市教育委員会	
150	くばつるべ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	210	鬼瓦(ク)	1	2	川崎市教育委員会	
151	アダン葉草鞋	1		三重県立博物館収蒐出品	平良	211	紙本彩色首里那覇鳥瞰図	1		古江家	
152	みの	1		三重県立博物館収蒐出品	下地	212	紙本彩色琉球風俗絵	1		古江家	
153	木杓子	1		三重県立博物館収蒐出品	池間	213	椰子グワア(ヤーン)	1		古江家	酒器 本瓦1 平瓦2
154	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	214	首里城古瓦	3		古江家	
155	くばづ	1		三重県立博物館収蒐出品	下地	215	花染手中紙本彩色琉球風俗図巻	1	7	古江家	官古島
156	のぞき水面眼鏡	1		三重県立博物館収蒐出品	池間	216	紅葉白地水模様(子供用)	1		石川家	
157	あずくや	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	217	藍地水草模様	1		石川家	
158	魚具入	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	218	黄地木綿梅紅葉模様	1		石川家	
159	水あかとり	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	219	黄地絹地松竹梅模様	1		石川家	
160	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	久松	220	手島織茶色	1		石川家	
161	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	新(瀨)	221	紅型風呂敷木綿大模様	1		石川家	
162	もり	1		三重県立博物館収蒐出品	池間	222	小片紅型木綿布	1	7	石川家	
163	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	223	紅型衣裳	4	4	山辺家	
164	ク	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	224	ジーファー	2		東京大学	
165	女子の下着	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	225	陶器	1		東京大学	
166	種子入	1		三重県立博物館収蒐出品	久松	226	小刀	1		東京大学	
167	漁獲具	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	227	墨入	1	5	東京大学	
168	網針	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	228	石器	25		早稲田大学	
169	飛魚網	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	229	土器片	30		早稲田大学	
170	ふかざり針	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	230	貝製品	4		早稲田大学	
171	かじき	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	231	青磁断片	8		早稲田大学	
172	まぐろ	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	232	民具	12		早稲田大学	
173	弁当用籠	1		三重県立博物館収蒐出品	ク	233	沖縄写真	29	108	早稲田大学	
174	地機	1		三重県立博物館収蒐出品	狩俣	234	紅型染め工程	1	1	女子美術大学	
175	むしろ(スダレ)	1		三重県立博物館収蒐出品	平良	235	尚玉川子筆	2		沢田家	
176	むしろ(藁)	1		三重県立博物館収蒐出品	竹富	236	浦添王子筆	2		沢田家	
177	網袋	1		三重県立博物館収蒐出品	石垣	237	漆器	3	7	沢田家	
178	海浜用わらじ	1		三重県立博物館収蒐出品	池間		合計		524		
179	着物	1		三重県立博物館収蒐出品	石垣						
180	クバ笠	1		三重県立博物館収蒐出品	ク						

表3 各都道府県別慰霊塔建立一覧（建立年順）

建立年順	都道府県名	塔・碑名	建立年月日	建立場所	建立者氏名	合祀柱数 (南方諸地域含む)
1	北海道	北霊碑	1954年4月	糸満市米須嵩下原1448	北海道連合遺族会	640(40085)
2	和歌山県	紀乃国之塔	1961年11月30日	糸満市米須嵩下原1438	和歌山県	(839)
3	秋田県	千秋の塔	1962年1月1日	糸満市字摩文仁ハナ上原649-1	秋田県	432(37,700)
4	愛媛県	愛媛之塔	1962年10月17日	糸満市字摩文仁ハナ上原664-2	(財)愛媛県遺族会	2,077(2,077)
5	石川県	黒百合の塔	1962年11月7日	糸満市字摩文仁ハナ上原649-1	石川県	901(1,069)
6	群馬県	群馬の塔	1963年2月1日	糸満市字摩文仁ハナ上原662-2	群馬県遺族の会	850(30,771)
7	熊本県	火乃国之塔	1963年5月	糸満市字摩文仁ハナ上原649-4	(財)熊本県遺族連合会	(1,827)
8	長野県	信濃の塔	1964年4月1日	糸満市字摩文仁ハナ上原650-3	長野県	1,294(55,405)
9	京都府	京都の塔	1964年4月29日	宜野湾市字嘉数1067-1	沖縄京都の塔奉賛会	2,536(2,536)
10	兵庫県	のじぎくの塔	1964年6月13日	糸満市字摩文仁ハナ上原662-3	兵庫県遺族会	3,073(3,073)
11	鹿児島県	安らかに	1964年11月	糸満市字摩文仁ハナ上原649-7	鹿児島県	2,582
12	青森県	みちのくの塔	1964年11月11日	糸満市字摩文仁ハナ上原665-3	青森県遺族連合会	544(19,847)
13	茨城県	茨城の塔	1964年11月20日	糸満市米須嵩下原661-2	茨城県遺族連合会	610(約38,000)
14	滋賀県	近江の塔	1964年11月25日	糸満市字摩文仁ハナ上原664-3	滋賀県近江の塔維持管理会	(1,697)
15	山形県	山形の塔	1965年2月6日	糸満市字真栄里ケル原1821-2	山形県	765(40,834)
16	大阪府	なにわの塔	1965年4月26日	糸満市字摩文仁ハナ上原656-6	大阪府遺族連合会	2,400余(35,000余)
17	三重県	三重の塔	1965年6月26日	糸満市字摩文仁ハナ上原656-4	三重県	2,600(53,000)
18	岡山県	岡山の塔	1965年10月21日	糸満市字摩文仁ハナ上原664-1	岡山県	1,578(33,799)
19	愛知県	愛国知祖之塔	1965年11月	糸満市字摩文仁	愛知県	2,953(51,149)
20	富山県	立山の塔	1965年11月5日	糸満市字摩文仁ハナ上原657-2	南方戦没者沖縄慰霊塔奉賛会	872(14,872)
21	大分県	大分の塔	1965年11月17日	糸満市米須嵩下原1446	大分県遺族連合会	約1,430
22	宮崎県	ひむかしの塔	1965年11月18日	糸満市米須西原138-1	宮崎県戦没者等慰霊奉賛会	1,848(31,237)
23	神奈川県	神奈川の塔	1965年11月26日	糸満市米須嵩下原662-5	神奈川県	1,678(40,680)
24	千葉県	房総の塔	1965年12月3日	糸満市米須嵩下原663-4	千葉県	1,586(35,694)
25	徳島県	徳島の塔	1965年12月5日	糸満市字摩文仁ハナ上原655-3	徳島県遺族会	941(1,597)
26	岐阜県	岐阜県の塔	1966年4月30日	糸満市字摩文仁ハナ上原656-55	岐阜県	907(26,831)
27	静岡県	静岡の塔	1966年4月30日	糸満市字摩文仁	(財)静霊奉賛会	1,693(40,495)
28	長崎県	鎮魂長崎の碑	1966年9月	糸満市字摩文仁ハナ上原651-5	長崎県殉国慰霊奉賛会	1,800(35,000)
29	福井県	福井の塔	1966年10月17日	糸満市字摩文仁ハナ上原662-4,663-3	福井県英霊顕彰奉賛会	1,182(24,507)
30	佐賀県	はがくれの塔	1966年10月17日	糸満市字摩文仁ハナ上原650-3	佐賀県遺族会	914(約28,000)
31	岩手県	岩手の塔	1966年10月20日	糸満市字摩文仁ハナ上原656-6	岩手県	653(34,860)
32	福島県	ふくしまの塔	1966年10月26日	糸満市字摩文仁ハナ上原650-5	福島県遺族会	942(66,304)
33	山口県	防長英霊の塔	1966年11月6日	糸満市字摩文仁ハナ上原649-12	山口県沖縄戦没者慰霊奉賛会	1,043(24,447)
34	山梨県	甲斐の塔	1966年11月8日	具志頭村字具志頭須武座原1465-1	山梨県	524(22,048)
35	高知県	土佐之塔	1966年11月8日	具志頭村字具志頭須武座原1457	高知県	832(18,545)
36	栃木県	栃木の塔	1966年11月9日	糸満市字摩文仁ハナ上原642-3	栃木県遺族連合会	676(31,495)
37	埼玉県	埼玉の塔	1966年11月25日	糸満市米須嵩下原655-3	埼玉の塔管理委員会	1,040(28,031)
38	福岡県	福岡の塔	1966年12月5日	糸満市字摩文仁ハナ上原656-7	福岡県	4,055(4,055)
39	奈良県	大和の塔	1967年11月16日	糸満市米須嵩下原1448	奈良県	556(15,871)
40	宮城県	宮城の塔	1968年2月	糸満市字摩文仁ハナ上原651-6	宮城県	582(45,500)
41	香川県	讃岐の奉公塔	1968年5月18日	糸満市米須嵩下原1455-3	(財)讃岐の奉公塔慰霊奉賛会	1,120(32,413)
42	広島県	ひろしまの塔	1968年5月23日	糸満市米須嵩下原1447-2	広島県	1,270(34,634)
43	鳥取県	鳥根の塔	1969年3月28日	糸満市米須嵩下原1445-1	鳥根県遺族連合会	908
44	東京都	東京之塔	1971年10月27日	糸満市米須山城南コナ原568	東京都	6,500(103,000)
45	鳥取県	因伯の塔	1971年11月4日	糸満市米須山城南コナ原572	鳥取県	539(13,904)
46	新潟県	新潟の塔	1976年12月8日	糸満市字摩文仁	新潟の塔奉賛会	1,117(41,960)

表4 他県で開催された主だった沖繩に関する展示会(人文系)一覽

No	展示会名	会場	開催形態	期間(※貸出期間)	展示内容	展示資料	備考
1	沖繩文化展	三重県立博物館	主催：三重県立博物館・三重県教育委員会後援：文部省、文化財保護委員会、東京大学人類学教室、日本民族学博物館、早稲田大学、立教大学、女子美術大学、NHK、中部日本新聞社、川崎市教育委員会協賛：近畿日本鉄道、三重交通、大阪琉球物産幹旋所、三重県婦人会、三重県遺族会	1982年4月6日～5月6日	民俗、歴史資料を中心に展示	237件524点	
2	これが沖繩だ展	①東京・日本橋三越②名古屋・名鉄百貨店③大阪・近鉄百貨店(アベノ店)④福岡・岩田屋⑤熊本・鶴屋	主催：沖繩タイムス社・朝日新聞社後援：沖繩芸能協会、琉球政府立博物館、琉球政府文化財保護委員会 協賛：日本航空、琉球海運	①1968年4月23日～28日②5月2日～8日③5月17日～22日④5月28日～6月2日⑤6月7日～12日	沖繩の歴史を戦前、戦中、戦後の3つの時期に分けて、総合的かつ系統的に紹介する展示。王府時代の美術工芸品、戦争遺品、戦後の民衆資料や写真等で構成	美術工芸品約90点、沖繩戦関関係資料約100点、写真約100点、戦後資料約50点	沖繩県立博物館(沖繩県博)貸出資料100点、沖繩タイムス本社創立20周年記念行事
3	琉球の文化 沖繩美術展	徳川美術館	主催：徳川美術館・中日新聞社 後援：琉球政府文化財保護委員会、名古屋市中区、愛知県、岐阜県、三重県教育委員会	1968年4月27日～5月26日	琉球の美術工芸品の展示(沖繩からは大編織コレクション、その他民芸館資料も含まれる)	染物20点、織物19点、漆器44点、漆器25点、陶磁器26点、書画4点	
4	沖繩染織展	サントリリー美術館	主催：サントリリー美術館	※1968年10月22日～11月22日			政府立博物館(沖繩県博)貸出資料・染織品20点
5	沖繩の工芸	京都国立近代美術館	主催：京都国立近代美術館	1974年10月1日～11月17日	陶芸、漆芸、染織など沖繩の工芸全体の過去と現在を含めた展示会、現代作家26点の資料も含む	染物44点、織物82点、陶器82点、漆器53点、楽器21点	沖繩県立博物館(沖繩県博)貸出資料・美術工芸43点
6	あれから35年一 鉄の暴風、沖繩 戦の全容「ひめ ゆりの乙女たち」 展	①東京・上野松坂屋②名古屋松坂屋③大阪松坂屋④静岡松坂屋⑤千葉そごう⑥山形松坂屋⑦仙台藤崎⑧横浜松坂屋⑨那覇三越	主催：朝日新聞社・沖繩タイムス社	①1980年7月16日～22日②7月24日～29日③7月31日～8月5日④8月7日～12日⑤8月22日～27日⑥8月29日～9月3日⑦9月12日～17日⑧10月9日～14日⑨10月18日～30日	男女学徒の生と死の記録を基に、19万人の犠牲者をだした沖繩戦の全容を語る歴史展示	沖繩戦に関する一次資料、証言集など二次資料を含めて約120件	戦後35周年
7	琉球漆器展 未公開コレクション	板橋区立美術館	主催：板橋区立美術館・毎日新聞社 協賛：沖繩開発庁	1983年4月9日～5月8日	従来「唐物」といわれた琉球漆器コレクションの展示	漆器110点	「復讐10周年記念」と銘打
8	沖繩の美—風土 と美術工芸	熊本県立美術館	熊本県立美術館	※1983年11月8日～12月11日			沖繩県博貸出資料・500点
9	琉球尚王家秘宝 展	西部百貨店池袋店8階(西部アクト・フォーラム)	主催：西部百貨店池袋店	1984年5月25日～6月6日	尚家所蔵の秘藏品展	衣裳28点、漆器8点、陶器3点、刀2点、金工品2点、紅型型紙	
10	海上之邦おきな わ	埼玉県立博物館	主催：埼玉県立博物館	※1986年10月24日～12月17日			沖繩県博貸出資料・歴史資料137点
11	沖繩の雅び—琉 球王朝の美—	名古屋城天守閣二階展示室	主催：名古屋城美術展開催実行委員会(名古屋市中区)、中日新聞社、東海テレビ放送、東海ラジオ放送、名古屋タイムス社、(股)名古屋城振興協会	1991年10月25日～11月24日	琉球漆器や染織を中心に展示	67点	沖繩県博貸出資料・美術工芸25点

12	海上の道—沖繩の歴史と文化—	東京国立博物館東洋館特別展示室	主催：東京国立博物館・読売新聞社 後援：沖繩県教育委員会 協賛：JCB	1992年1月7日～2月16日	考古学遺物をもとに南島の先史文化からグスク時代、琉球王朝の歴史と文化を体系化した展示	考古、歴史、美術工芸、民俗資料236点	「復讐20周年記念特別展」と銘打
13	海上の道—沖繩の文化—	名古屋博物館	主催：名古屋博物館	1992年2月17日～4月20日	沖繩の歴史と文化を通してアジアの中の沖繩の文化、日本文化を再考する展示会	歴史、考古、民俗、工芸資料199点	沖繩県博貸出資料・歴史資料他85点
14	琉球王朝の美	京王アパルト新宿店	主催：沖繩県、(社)沖繩県物産公社	※1992年4月27日～5月19日	沖繩の自然、歴史、文化を総合的に紹介する展示	自然史、考古、歴史、美術工芸105件144点を中心に物産資料も展示	沖繩県博貸出資料・自然史、考古、歴史、美術工芸105件144点
15	琉歌—南のうたの心	日本書道美術館	主催：(財)日本書道美術館	※1992年9月28日～12月7日			沖繩県博貸出資料・書道資料17点「復讐20周年記念」と銘打
16	沖繩ものがたり	岡山城	主催：岡山市、山陽新聞社	※1998年9月20日～11月30日			沖繩県博貸出資料・自然・歴史資料61点
17	琉球王朝の美	彦根城美術館	主催：彦根城美術館	※1998年10月13日～12月10日			沖繩県博貸出資料・歴史・美術工芸資料37点
18	紅型—琉球衣裳の美—	北海道立近代美術館・北海道立帯広美術館	主催：北海道立近代美術館・北海道立帯広美術館	※1994年6月28日～9月30日	沖繩の染ものを代表する「紅型」を中心とした展示		沖繩県博貸出資料・紅型資料30点
19	沖繩の工芸美術展	奈良県立美術館、長野県立信濃美術館、千葉県立美術館、千葉県立美術館	主催：奈良県立美術館、長野県立信濃美術館、千葉県立美術館	※1995年6月20日～10月20日	沖繩の工芸の体系的展示		沖繩県博貸出資料・工芸資料103点
20	南海の国・沖繩をたずねて—沖繩復讐25周年記念展—	通信博物館	主催：通信博物館 協力：沖繩県立博物館、京都市美術館、国立科学博物館、沖繩通信博物館	1997年4月25日～5月11日	琉球切手やその原画を中心に展示	325点	
21	沖繩のやきもの—南海のからの香り—	佐賀県立九州陶磁文化館	主催：佐賀県立九州陶磁文化館	1998年9月11日～10月25日	完品や考古資料を含めた「沖繩のやきもの」の体系的展示	329点	
22	沖繩のやきもの展	富山市豊牛人記念美術館	主催：富山市教育委員会	1999年10月9日～11月28日	土器、パナリ焼、喜名・知花焼、八重山焼、古我知焼、薄田焼、壺屋焼	陶器74点	
23	尚王家と琉球の美展	MOA美術館	主催：MOA美術館協賛：日本航空	2001年10月26日～11月21日	那覇市所蔵の尚家継承文化遺産の衣裳類40点と漆工品の展示	衣裳40点漆器65点出土遺物1件	
24	沖繩の染めと幻の花織—南の国の色とアサイン—	サントリ—美術館	主催：サントリ—美術館	2002年2月12日～3月24日	紅型と花織の多彩な色彩と意匠の染織展示	染織資料255点	「返還30周年記念」と銘打